

公共空間におけるサウンド・アートに関する基礎的調査研究

正会員 ○ 大嶋 拓也¹⁾サウンド・アート パブリック・アート 実地調査
文献調査

1 序

サウンド・アートは20世紀初頭の創始[1]以来、インタラクティブ・アート、屋内外のパフォーマンス、インスタレーションなど様々な形態を取りながら発展してきた。しかしながらその表現形態の多様性から、学術的に網羅されているとは言い難い状況にある。翻って公共空間におけるサウンド・アートに着目すると、誰もが鑑賞できること、また同一の場所に恒久的に存在することが前提であるため、作品に場所性が盛り込まれる可能性がある点において、建築との関わりが強いと見ることができる。そこで本研究では、公共空間におけるサウンド・アートの作品実例収集、現況調査などの基礎的な調査研究を行う。

2 研究概要

本研究では、まずサウンド・アートと称される分野を概観するため、関連文献を収集する。さらに、公共空間におけるサウンド・アートを、

1. 音が出る、もしくは音を聴くための仕掛けがあり、
2. 誰でも見ることができる恒久的な作品であり、
3. 主に音楽を主体としない音を表現媒体としている芸術作品と定義し、文献から得られた当該アート実例に対し、現地調査、および作品管理者にアンケート調査を行う。

3 結果概要

新潟大学附属図書館、新潟県立図書館、ICC 図書館、国立国会図書館蔵書検索、新刊・古書店、インターネット検索、新聞記事検索から文献探査した結果、120件(うち書籍19冊、雑誌記事88件、論文5件、新聞記事8件)が存在した。現地調査については、作品所在地が判明したものうち関東を中心に、表1に示す作品A-Qの17作品について、写真撮影(図1)・現地録音・関係者インタビューなどを行った(表1)。アンケート調査については、作品管理者の判明した9作品に対し、作品の設置理由およびメンテナンス状況などを問うアンケートを郵送し、7作品(うち現地調査未実施の2作品を作品R[島根県出雲市]、S[大分県中津市]とする)について回答を得た(表2)。

4 考察

4.1 サウンドアートの一般的認知について

まず文献調査から、1993年から2007年までの雑誌記事掲載件数の推移は表3のとおりである。2002年・2003年の記事数増加については、特定誌においてサウンド・アートに関する特集および連載が組まれたことが寄与しており、当該要因を除けば特定のトレンドは見られない。

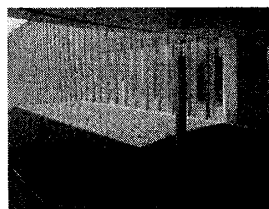


図1 サウンドアート作品例(左:作品G、右:作品N)

表1 現地調査作品所在地・現況(網掛けは非動作作品)

作品	所在地	制作年	現況
A	福島県いわき市	2004	良好
B		2004	良好
C	新潟県十日町市	2003	良好、作品制作時写真展示あり
D	埼玉県さいたま市	不明	状態劣悪、落書き・傷多数あり
E	新潟県十日町市	2003	屋内作品、状態良好
F	新潟県長岡市	1999	素焼き部品破損により故障、修理予定無し
G	福島県東白川郡	1997	漏水故障、修理未定
H	埼玉県さいたま市	2000	屋内作品、動作せず
I	愛知県岩倉市	1997	動作せず
J		1997	状態良好
K		1996	動作せず
L		1996	動作せず、状態劣悪
M		1996	状態良好
N		1997	動作せず
O		1997	動作せず
P	群馬県藤岡市	1995	状態良好
Q	埼玉県騎西町	2000	状態良好

また、記事掲載誌の全てが、デザイン、美術、建築雑誌などの専門誌であった。新聞記事については、1990年から2007年までに8件のみであり、すべて展覧会案内等の簡潔な記事であった。したがって文献調査からは、サウンド・アートへの経年的な認知度の向上は見られない。

さらに、5作品の現地調査において、作品の隣接施設従業員あるいは近隣住民(各作品1名)に、当該作品に関するインタビューを行った。その結果、3名は作品を聴いた経験が無く、うち作品H所在施設従業員の1名は当該作品がサウンド・アートであることすら知らなかった。一方で、作家と住民によって共同制作された[2]作品群I-O近隣住民は、作品制作から10年以上が経過しているにも

表2 アンケート調査結果（網掛けは非動作作品、括弧囲みは現況不明作品）

作品	サウンドアートを設置した理由	メンテナンス
A	海洋環境の魅力を、聴覚も通じて感受することにより、環境体験をよ	照明器具の点灯確認および集音マイクロホンの感度確認を定期的実施。
B	り豊かなものにするため。	
F	公園内広場にサウンドスケープのオブジェを絡め、環境演出上の効果を高める。	日常的な本体清掃、音質・美観維持のため、設置業者技術員による定期的なメンテナンス、凍結・積雪対策の冬期養生を実施。
P	公園内丘陵部の展望ゾーンに、風笛をイメージした作品を公園整備時に設置。丘の上を吹く風から、土地の歴史・自然を感じることができる。	特別なメンテナンスは不要。
Q	隣接する環境関連施設の建設に伴い、環境をテーマにした公園を整備した。それにより、環境（音・光）をテーマとした作品を設置。	メンテナンスフリー。ガラスの清掃など。
(R)	人が集まるところに安らぎと憩いの空間を創出し、提供するため。	メーカーのメンテナンスは実施せず。
S	近隣施設的设计者に委託。詳細は不明。	メンテナンスに年300～400万円を要するため、現在は作動を停止。

表3 サウンドアート関連記事数の推移

年	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
件数	10	0	0	14	11	0	8	1	0	21	15	4	0	2	2

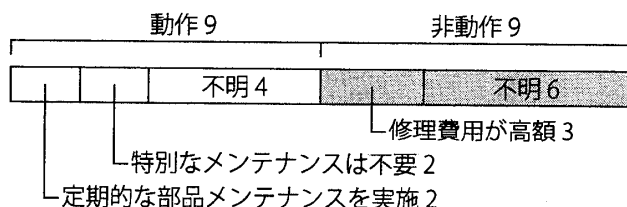


図2 動作作品の実施メンテナンスおよび非動作作品の非動作理由（数字は作品数）

かかわらず、当該作品群を熟知していた。

これらのことから、サウンド・アートは一般的にはそれほど認知されていない。しかし、住民参加によって制作された作品については、認知度が上がる可能性があると言える。

4.2 作品の現況について

作品現況の判明した18作品のうち、D、F、G、H、I、K、L、N、O、Sの9作品は、発音装置の故障等によって音が出ないなど、サウンドアートとして機能していない状態であった（図2）。また、アンケート調査でのメンテナンスの設問については、動作作品では作品A、Bで照明の点灯確認および集音マイクロホンの感度確認を実施、作品P、Qで特別なメンテナンスは実施せずとの回答であった。一方、非動作作品F、G、Sについては、インタビューおよびアンケートから、修理しない理由としてメンテナンス費用が高額であるためとの回答を得た。特に作品Fでは設置業者によるメンテナンス、および冬期破損防止の養生実施にもかかわらず非動作の現況であり、作品維持の困難さを窺わせる。よって、サウンドアートはその仕組みが複雑になりやすく、さらに、メンテナンスに要する手

間および費用のために恒久的な作品の維持管理が難しく、時間とともに作品の風化を招きやすいと考えられる。

4.3 作品設置意図について

アンケート調査での設置理由に関する設問により、作品の多くが、近隣の環境関連施設あるいは公園等の建設と併せて、当該施設と関係性の強い作品として設置されていた。例えば、作品A、Bは同一敷地内の水族館および公園で得られる環境体験をより豊かにするために作品下の波の音を聴かせる作品として、作品Qは隣接する環境関連施設の建設に伴い、環境（光・音）をテーマとした作品として制作されていた。アンケート回答の得られなかった作品に関しても、文献などから作品E、G、H、Iにおいて、作品設置場所地下湧水の音から当該地の歴史の喚起を狙うなど、作品設置場所の環境あるいは歴史と密接に関連した要素を盛り込んでいることが判った。

5 まとめ

公共空間におけるサウンドアートの実地調査および作品管理者へのアンケートから、作品の多くが、音を利用することによって、土地の歴史および周辺の自然環境への関心を喚起させることを狙っていることが判った。しかしながらサウンドアートは一般への認知度が低く、また発音装置等の仕組みが複雑となるために恒久的な維持管理には困難が伴いやすい。そのため維持管理を熟慮した作品の計画および制作、さらに一案として、住民参加型の作品制作などによる一般への認知向上が望まれる。

謝辞 アンケートに回答いただいた関係各位、および新潟大学建築学コース2007年度卒業研究生・富澤哲哉氏の協力を感謝する。

参考文献 [1] ダグラス・カーン、Music Today, pp. 2-9, 1993.10

[2] 上本裕保ほか、日本建築学会学術講演梗概集F-1, pp. 739-740, 1998.9

¹ 新潟大学工学部 助教・博士（環境学）

¹ Assist. Prof., Faculty of Eng., Niigata Univ., Ph.D.